

2002年度別科活動報告

清水 厚子

1. はじめに

2002年度別科日本語研修課程は、21名の学生を受け入れ、2002年4月5日から2003年1月16日まで合計35週にわたって行なわれた。授業は月曜日から土曜日までの週6日制で、90分授業を1コマとして週当たり日本語16コマ、日本事情1コマ、英語2コマ行なった。また課外活動として茶道体験、親睦会、交流会、研修旅行なども実施した。

以下に2002年度の別科活動の概要を報告する。

2. クラス及びレベル

学期始めに日本語・英語クラス分けテストを行ない、日本語は3クラス（Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ）英語は2クラス（A・B）にそれぞれ学生を振り分けた。

日本語クラスに関しては、Ⅰ・Ⅱクラスは初級、Ⅲクラスは初級後半～中級とした。

3. 学生について

総数：21名（定員20名）

男性：11 女性：10

クラス別：Ⅰクラス：4 Ⅱクラス：8 Ⅲクラス：9

（数回の学生移動があり、最終的に決定した数字）

国別：中国：15 台湾：2 マレーシア：1 コンゴ（ザイール）：1 トンガ：1
タイ：1

4. 各クラスの授業概要（注1）

Ⅰクラス

使用教材：「みんなの日本語」初級Ⅰ・Ⅱ

「初級で読めるトピック25」初級Ⅰ・Ⅱ

基本漢字500（VOL.1）

Ⅰクラスは当初タイ人とトンガ人の2名の学生で授業を進めた。この2名の学生は全くゼロスタートで、その上非漢字圏であるため、まず文字の導入（よみ方、かき方）から始めた。（ひらがなとカタカナ）そうする一方で口頭練習によって基本文型を導入していった。5月に入り教科書を用いて音読練習や問題練習に進んでいったが、音と文字との一致、文字とことばの意味の理解、音とことばの意味の理解などができているかどうかを確認し

ながらの作業で、かなり時間がかかる状態が続いた。また2名での授業は1名が休めば1名になってしまうということがおこり、授業を進めていく上で支障をきたすことも多く、殆ど毎日担当者が打ち合わせて試行錯誤を繰り返すこともあった。6月末にⅡクラスからマレーシア人と中国人が入り4名で授業を進めていくことになった。(但し中国人は長期欠席のため実質3名の授業となる)これにより2名の時よりいくらか授業らしい授業ができるようになり、7月の前期末で初級前半を終えることができた。全くのゼロスタートであった2名の学生も何とか日本語でコミュニケーションがとれるまでに上達していった。

後期は、前期の初級前半で学習した基礎的な語彙、文型(文法事項)、表現の定着をはかりながら、初級後半の新出語彙、文型、表現を口頭練習、書く練習によって学習していった。また初歩的な教材を読み、文脈を読み取る力をつける練習もした。週一回漢字指導を行った。学生は漢字を学びながら日本語を学ぶということで、大変興味をもち熱心に取り組んでいたのもそれなりの相乗効果があったように見受けられた。

しかし、やはり3名の学生の諸事情(けが・病気・一時帰国・アルバイト)により欠席する学生がでて、3名揃っての授業の日が少ないという問題が生じた。総じて2~3名のクラス授業という点で考えさせられることの多い一年だったといえる。

担当者：清水厚子(担任)・石井陽子・福嶋美知子・大河原尚・松嶋緑

Ⅱクラス

使用教材：「みんなの日本語」初級Ⅰ・Ⅱ

「初級で読めるトピック25」初級Ⅰ・Ⅱ

「テーマ別中級から学日本語」及び同ワークブック

「毎日の聞きとり50日」初級上・下

Ⅱクラスは中国人9名とコンゴ人・マレーシア人各1名の11名体制で始まったが、6月下旬に2名がⅠクラスへ移動したため8名で1月を終えた。

授業は、午前中は基本的に一つの中心となる教材をリレーで教える体制をとった。初級前半の教科書の基本的な文型表現の確認から始まり、定着を重視することに重きをおいたため、6月中旬に初級Ⅰを終え、後期11月の文化祭明けに初級Ⅱが終了した。終了後は、中級前半期に初級文型の復習を兼ね、また学部に入っても役に立てるような実践的な読解力がつくように、速読と精読の二種類に分けた授業をした。速読では「スキミング」的なことを目標とし、一部初級文法の復習やトピックを使った応用会話練習も試みた。さらに1コマ独立させて「スキニング」的なことの習得に視点をおいた授業を行った。精読は中~長文の理解ができるようになること、段落ごとの理解から文章全体の内容把握ができることを目標に指導を行なった。

リレー以外の授業は、以下の科目があった。

- 1) 前期初級時「読解」：中心教材の読みの部分をまとめて学ぶ。既習文型の確認と速く内容がつかめることに重きをおいた。後期はこの時間がスキニング定着の時間になった。
- 2) 通年「会話」：ビデオなどを使用した。
- 3) 前期~12月まで漢字の読み書き：非漢字圏学生1名を除いた中国人学生に実施した。

初級終了までの漢字の基本的な読み、書きの指導が中心だった。

- 4) 通年「作文」：初級前半から文型の復習を兼ね、100字～400字ぐらいまでの作文が書けるようになることを目標に二週間に1回ぐらいのペースで作文指導を行なった。また、発音矯正の指導を取り入れたこともあった。
- 5) 後期「日本事情」：1. 日本の基本的な地形・気候・都道府県所在地などに関すること。2. 研修旅行の事前指導。3. 年末年始の日本の文化・習慣・風俗について。4. 学部に入る前のオリエンテーション（特に履修届と奨学金を中心に）を不定期に実施した。
- 6) 後期「パソコン作文」：パソコンを日本語で入力する基礎からの指導を行なった。

その他：嘱託講師の時間を使って、聴解、文法復習などの指導、週に一回の週間試験を行なった。

Ⅱクラスの場合、まず基本的な文型、文法、表現の定着指導に重きをおいた。初中級レベルになった段階で、学部に行って少しでも困らない力をつけようと、いろいろ試行錯誤した感もあったが、最後に学生にそれらの科目の評価を聞いたところ、学生は意外に評価していたようであった。

担当者：松嶋緑（担任）・茜八重子・井上敬子・塩田安佐・大河原尚・清水厚子

Ⅲクラス

使用教材：「みんなの日本語」初級Ⅱ

「初級で読めるトピック25」初級Ⅱ

「テーマ別中級から学ぶ日本語」のワークブック

「留学生の日本語」①読解編③論文読解編

I 学生

四月当初は8名でスタートし、後期になってⅡクラスより1名が移動して9名となった。学生はそれぞれ別科入学以前に約1年程度あるいはそれ以上の日本語学習歴を持ち、中でも2名は1年以上の日本滞在の経験があった。そのため、クラス全体としては、初級の学習は一応終了しているものと考えられた。

Ⅱ前期授業（午前）

初級の学習は一応終了していると考えられたものの、その理解度には学生間でそれぞれ差が見られた。また習得している項目にもそれぞれ異なっていたため、初級後半の復習から開始した。

Ⅲ後期授業（午前）

初級後半の復習は、ほぼ前期で終了し、後期は読解と聴解を中心とした中級に入った。ここでは、学部進学後の事を考慮し、自分の意図をいかに構成し表現していくかということよりも、未知の事柄をどう処理し、いかに全体としての理解を得るかということに重点を置いた。

Ⅳ午後の授業

午後の授業では、前期・後期を通じてそれぞれの時間で一つ乃至二つのテーマを設定して、それに沿って授業が進められた。

①文法復習／作文

前期は、午前で初級の復習をしているため、それを補う意味で文法事項のまとめを行い、より理解を進めた。

また、後期は、前期の文法の復習を踏まえ、作文の授業を行なった。しかし、ここでの重点は、文章としての構成ではなく、文法事項をいかに文脈の中で使っていくかということに置き、文法事項の理解を深めることを目指した。

②理解

一年を通し、単純で統制された材料を理解するところから、最後は生の日本語を教材として理解できることを目指した。しかし、ここでは実際に生の日本語が理解できるかどうかということよりも、一つは生の日本語に触れる経験、もう一つは分からないことが多い生の日本語に対してもなんとか理解しようとする態度を養うことに重点を置いた。

③その他

その他に、週一度の週間試験による学生へのフィードバック、後期からのパソコンによるワープロの授業を行なった。

担当者：大河原尚（担任）・小林美和子・杉山ます代・井上敬子・石井陽子・清水厚子・松嶋緑

5. 前期集中授業について

別科の学年暦は大学の学年暦に沿って一年間の予定がたてられているため、学習期間がかなり短い。そこで少しでも多くの時間を授業できるようにということで考えられたのが、前期集中授業である。この期間は前期授業が終了したあと、嘱託講師がまとめの授業をし、そのあとで前期末試験、統一試験を行なっている。従って別科生は7月末迄授業があることになる。

6. 試験について

①週間試験（毎週一回）の実施

毎週、その週にクラスで勉強したことについて各クラスごとに簡単な試験を行なった。

②期末試験（7月・1月）の実施

前期と後期の終わりに、それまで勉強したことについて各クラスごとに試験を行なった。

③統一試験（7月・10月・1月）の実施

クラスのレベルに関係なく全員同じ問題で試験を行なった。この試験は学部推薦の際の参考資料とするもので、前期末と後期始めに行なった。また昨年度は後期末の1月に10月と同一問題で再度試験を行ない、学生の伸び率をみる資料とした。

④日本語能力試験の受験（12月）

日本語能力試験の受験は学部推薦の条件の一つになっているため、別科生は1級又は2級（本人の希望）を全員受験した。

7. 作文集の作成

この作文集は別科生の一年間の日本語の成果を発表するものとして、1997年度より毎年発行している。作成に際しては、11月から毎週一回パソコンによるワープロ授業を行ない、今迄書いてきた作文の打ち込みを行なっている。

8. 学部推薦について

別科において成績優秀と認められる者については、別科よりその学生の希望する本学学部へ推薦入学制度がある。現在別科に入学する学生のほとんどは、この推薦制度を利用して学部入学を希望している。従って当然のことではあるが、推薦に関することは別科学生の最大の関心事なのである。昨年度は進路希望調査を3回実施し（4月・7月・10月）、別科統一試験を2回行ない（7月・10月）、前期成績出席率を考慮した上で、各学生を希望する学部へ推薦した。推薦試験の結果18名が学部に入学することができた。内訳は下記の通りである。

日本語学科1、現代経済学科2、社会経済学科3、経営学科5、企業システム学科4、国際関係学科2、環境創造学科1

9. 課外活動について

①茶道体験学習（6月）

日本語学科関口伊都子助教授の指導の下に2001年度に続き昨年度（2002年度）も6月に行なった。本学茶室での茶道体験は別科生にとって貴重な体験として喜ばれている。

②親睦会・交流会（5月・12月）別科から学部に進学した先輩を呼び、別科生との親睦・交流をはかっている。5月の親睦会は別科入学間もない新入生に対し、先輩から別科での一年間の勉強や生活について聞いたり、質問したりする機会としている。12月の交流会は別科生がすでに学部進学が決まったあとなので、先輩から学部での生活についてアドバイスを受けてたりもしている。昨年度は別科生全員がそれぞれ自分が書いた作文を口頭発表し、その後ビュッフェパーティーを楽しんだ。

③研修旅行（10月）

この旅行は、本学国際交流センターが外国人留学生のために毎年秋に二泊三日で行う研修旅行で、希望者が参加している。別科では課外授業の一環として全員参加するというにしている。旅行先は、関西・東海・北陸・東北地域を毎年順に行き、4年間で一巡できるようになっている。学生は先輩からこの旅行について聞いているようで、入学間もない頃から、今年の旅行はどこへ行くのかという質問をしてくるのが常である。昨年度は東海地域へ旅行し、名古屋、伊勢、豊田などを見学した。別科から大河原尚囑託講師が引率に加わったこともあり、別科生にはことのほか楽しい旅行となったことが、その後の学生の話しや作文などから察せられた。

10. おわりに

1997年度より別科に囑託講師という制度が設けられ、2000年度からは別科のクラスが3クラスになり、各クラスに囑託講師が担任として入りコースを運営していくようになった

ことからみても、別科の基本的な枠組みは次第に確立されてきているように思われる。また2000年度からは「別科通信」(注2)と称する書簡を発行し、別科生の保証人とも連絡を取り合いながら、別科生をサポートする態勢にも取り組んでいる。

しかしながら、本論集創刊号で述べられているように(注3)、未だ改善すべき問題があることも確かである。一例をあげれば、実質8ヶ月という短期間の日本語学習で大学へ進学するに足る日本語力をどうつけていくのか(特にIクラス)、学部推薦決定後の学習意欲の低下にどう対処すべきか、学業とアルバイトの両立で疲れきっている学生への対応などである。いずれにせよ、今後これらのことを踏まえ、カリキュラムを充実させていきたいと考えている。

注

- (1) 各クラスの授業概要は、各クラス担任が作成した授業報告を参照した。
- (2) 「別科通信」については、「別科論集」第4号(2002年3月発行)身元保証人制度廃止後の機関保証における在籍管理のあり方について—別科における保証人との関わり方への試み—福岡昌子に詳しく述べられている。
- (3) 「別科論集」創刊号(1999年3月発行)別科の現状と今後の展望 大河原尚